＜金子みすずの概略＞

大正末期から昭和初期の童謡詩人。西条八十から「若き童謡詩人の中の巨星」と賞賛されたが早逝のためその作品は散逸し、幻の童謡詩人と語り継がれるばかりだった。

１９０３年（明治３６年）４月１１日　山口県生まれ

１９２６年（２３歳）で結婚するが、夫の浮気や家庭内のトラブルに苦しむ。

　　　　　　　　　　夫から詩作を禁じられ、離婚を迫られるが娘を守るために離婚はせず。

１９３０年（２６歳）　精神的に追い詰められ、娘の将来を案じながら服毒自殺。

＜金子みすずの作品抜粋＞

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 私と小鳥と鈴と | こだまでしょうか | 雪 |
| 私が両手をひろげても、  お空はちっとも飛べないが  飛べる小鳥は私のように、  地面を速くは走れない。  私がからだをゆすっても、  きれいな音は出ないけど、  あの鳴る鈴は私のように  たくさんな唄は知らないよ。  鈴と、小鳥と、それから私、  みんなちがって、みんないい。 | 「遊ぼう」っていうと  「遊ぼう」っていう。  「馬鹿」っていうと  「馬鹿」っていう。  「もう遊ばない」っていうと  「遊ばない」っていう。  そうして、あとで  さみしくなって、  「ごめんね」っていうと  「ごめんね」っていう。  こだまでしょうか、  いいえ、誰でも。 | 誰も知らない野の果で  青い小鳥が死にました  さむいさむいくれ方に  そのなきがらを埋めよとて  お空は雪を撒きました  ふかくふかく音もなく  人は知らねど人里の  家もおともにたちました  しろいしろい被衣(かずき)着て  やがてほのぼのあくる朝  空はみごとに晴れました  あおくあおくうつくしく  小さいきれいなたましいの  神さまのお国へゆくみちを  ひろくひろくあけようと |
|  |  |  |